

ベトナムの伝統的私塾に関する研究のための 予備的報告

嶋 尾 稔*

はじめに

前植民地期ベトナムの教育制度に関する実証研究は、今のところ十分に進んでいるとはいえない。科挙に関する研究書が、この問題を取り扱っている場合もあるのだが、概括的な記述にとどまっている〔Nguyễn 1993〕〔Nguyễn T.C.Q 2003〕。夙に、藤原利一郎が黎朝初期（15世紀）における科挙制度の発展にともなう学校制度の整備について実証的に論じている〔藤原 1986〕が、残念ながら、次の時代への展開については未開拓のままである。また、従来、村の漢文先生の役割について言及したものが全く無かったわけではない〔Nguyễn K.V. 2003〕〔Truong 1982〕が、対象とする時代が植民地化以降・革命前の時期であり、問題を十分に掘り下げたものではなかった。とはいえ、展望がいささかも開けていないというわけではない。近年になってベトナム史研究の新たな沃野として注目されている碑文史料に依拠して、グエン・フウ・ムイが村の儒学教育について実証的に探求した論文を発表している〔Nguyễn 2005〕。また、阮朝から植民地期にかけての官僚と胥吏に関する重厚な研究をものしたE.ポワソンが、士人のための教育を検討している〔Poisson 2004〕。さらには、伝統的な初等教育のテキストについても関心が高まっている〔Trần 2000〕。

本稿では、このような研究状況を踏まえ、さらに日本においてベトナム前近代教育史に関する実証的な知識が全く欠落している（近代高等教育については〔近田 2005〕参照）という事情を考慮して、この問題に本格的に着手する前に押さえておくべき基礎情報を提供することにする。私自身が前近代ベトナムの私塾という問題に長年取り組んできたわけでも、独自の研究を発表しているわけでもないのに、勢い、雑駁な概論以上のものは書き得ないのであるが、東アジアの書院比較研究の視野を広げることにいささかでも寄与できればと思い、この主題に関連するいくつかの問題について粗描を試みてみることにしたい。まず、前近代ベトナムには書院がなかった、あるいは少なくとも書院という語が一般的ではなかったらしいことを確認したうえで、前近代教育の基本的な目標であった科挙制度について概観し、さらに革命前・前近代

* 慶應義塾大学言語文化研究所准教授

の北部ベトナムの村レベルの初等教育と19世紀のハノイの学校について現時点で語りうることを簡潔に記述する。

1 thư viện と書院

現代ベトナム語には *thư viện* という言葉がある。「図書館」という意味を表す語である。漢語起源の語であり、まさに「書院」という漢字が当たる。現在のベトナムには、各地に「書院」がある。近代的な図書館を *thư viện* と呼ぶようになったのは何時からか、そして図書館という意味を表す語として立ち現れる以前に *thư viện* という言葉はベトナムで果たして使われていたのか。網羅的な文献調査をする暇は無いので、ここではとりあえず手近にある若干の辞書の記述を確認していくことにする。

1931年に出版された開智進徳会編纂のベトナム語辞典〔Hội Khai Trí Tiến Đức Hội Khởi 1931〕は、*thư viện* に「書院」という漢字を併記し、「本を保存しておく建物 *Nhà chứa sách*」という解釈を与え、「*thư viện* を開いて人に本を見せる *Mở thư-viện cho người ta xem sách*」という例文を載せている。近代的な図書館のこと（閲覧専門のようであるが）を指示していると見てよからう。さらに1934年のジョルジュ・コルディエの仏越辞典〔Cordier 1934〕では、*bibliothèque* の項に “*tủ sách, giá sách, thư quĩ, thư viện, thư điểm, đồ thư quán, văn khố*” の訳を挙げ、*librairie* については、“*thư viện, đồ thư quán, văn khố, thư cục.*” の訳を挙げている（強調は筆者）。1936年のダオ・ズイ・アインの仏越辞典〔Dao Duy Anh 1936〕では、*bibliothèque* の項に “2. *nhà chứa sách, tàng-thư-viện* 蔵書院, *văn khố* 文庫, *đồ-thư-quán* 図書館” とあり、*librairie* については、“3. *đồ-thư-quán* 図書館, *văn khố* 文庫 (xưa)” とあるが、*thư viện* は出てこない。以上より、取り敢えず、1930年代に *thư viện* が図書館の意味で用いられていること、しかし、*thư viện* と並んで、*đồ-thư-quán* (図書館) などという表現も存在していたことが知られる。現在のベトナム語では、*đồ-thư-quán* という語は用いられない。図書館を表現する語彙が、何時 *thư viện* に統一されたのかを問うことはここでは擱く。

遡って、1898年のジェニブレル〔Genibrel 1898〕の越仏辞書では、*thư viện* の意味を “*école, collège*” と記しており、まさに漢語の書院の意味に合致する。ということは、*thư viện* という語は、図書館の意味で用いられる前に、漢語本来の意味でベトナムでも普及していたのだろうか。これはいささか怪しい。上述の通り、この点についても網羅的な調査を行うことは出来ないのだが、若干の証拠を挙げて、*thư viện* / 書院 という語が前近代ベトナムでは一般的ではなかった、あるいは書院と呼ばれる学校がベトナムには少なくとも広範には存在してはいなかったのであろうという推測を示しておくことにしたい。

まず、ジェニブレルに先行するロード〔Rhodes 1991〕、ピニョー〔Pegneaux de Behaine 1999〕、タベール〔Taberd 1838〕、オーバレ〔Aubaret 1867〕、ボネ〔Bonet 1899-1900〕などの

諸辞書・語彙集を見ても、その収録語彙の中に *thur việ̃n/thor việ̃n* が含まれていないことが挙げられる。次に、『大清一統志』を模して作られた『大南一統志』の各省の学校の項目には、県学・府学・省学が記されるのみで、書院についての記述が見られないことを指摘できる。中国であれば、中央・地方を問わず、地誌に必ず書院の記載があるだろう。たまたま手近にある『大明一統志』（和刻本）で、ベトナムに隣接する広西省を見ると、二つの書院が記載されている。やはりベトナムに接する広東省沿海部の『欽州府志』（東洋文庫蔵）などを見ても、いくつも書院の名前が挙げられている。本当にベトナムに書院と呼ばれる学校が無かったのかについて、今後広くベトナムの文献を精査して確認する必要があるが、以上の断片的な証拠からも、もしベトナムに書院と呼ばれる学校が存在したのだとしても、中国におけるそれとは位置づけが異なっていたことは推定できよう。

しかし、なぜ20世紀に入って、図書館を表す語として、*thur việ̃n* が選ばれたのか。この点については、後考を俟ちたい。

2 ベトナムの科挙概観

上に触れたように、植民地化前のベトナムの学校制度の中心にあったのは、省学—府学—県学である。これは地方行政単位の階層に対応している。ここでベトナム王朝、とくに19世紀に成立した最後の王朝阮朝の地方制度について述べておく。阮朝は、1830年代初頭に全国の地方行政制度の大改革を行い、省—府—県・州という三等級からなる清朝の地方制度の縮小コピーを導入した〔Woodside 1988〕。ここで注意すべきは、中国とベトナムの圧倒的な規模の差である。おおまかな話になるが、ベトナムの省は、中国の県に相当すると見てよい。清朝モデルに倣い、地方官として、省には総督・巡撫、府には知府、県には知県が派遣された。また、学官として、それぞれのレベルに、督学、教授、訓導が設置され、上に述べた省学、府学、県学を指導した。県より下のレベルでは、ベトナム独自の郷村自治の制度が布かれた。行政村・行政町として、社・坊が置かれ、その長である里長は村・町の会議で選ばれ、その結果を王朝が承認した。社の上位単位として、総が複数の社・坊を統べたが、その長である該総（正総）は、里長の間で選ばれ、王朝が承認した。後により詳しく見るように、村々では科挙の道を途中で降りた漢文先生たちが私塾を開き、社、総には、斯文会と呼ばれる「儒教的知識人」の会が作られた。

省学—府学—県学は、中国同様、科挙受験の指導をする学校である。他方、村の先生たちは、かつての科挙受験者たちである。前近代ベトナムの教育の内容・方向を決めたのは、間違いなく科挙制度であった。ここでは、前近代ベトナムの教育を考えるための前提として、ベトナムの科挙制度について、先行研究〔Texier 1962〕〔竹田 1962〕〔竹田 1964〕〔竹田 1975〕〔Nguyễn 1993〕〔Cooke 1994〕〔Cooke 1995〕〔嶋尾 2000〕〔嶋尾 2001a〕〔嶋尾 2001b〕〔Nguyễn T.C.Q

2003) 及び『国朝郷科録』(慶應義塾大学三田メディアセンター蔵)によりながら、とくに阮朝期を中心に概観しておく。

周知の通り、ベトナムは10世紀中に中国の支配を脱して独立を果たした。統治者は皇帝を称し、国号と年号を定めた。11世紀には初の長期王朝である李朝が建てられた。中国の制度に倣っている部分もあったが、集権的官僚制国家とは随分様相を異にする土豪連合的な国家であった。この時代に官吏登用試験が開始されるが、その試験内容は儒教独尊の科挙試験とは異なり、政治的な重要性も低かったと見られる。そもそも李朝は万行禪師らの仏教勢力の後ろ盾でつくられた国家であり、政治的威信を示すためにむしろ民間信仰や仏教が重視された。にもかかわらず、現在のハノイの文廟では、ベトナムにおける儒教的な学問の祖として李朝の太祖を祭っている。

続く陳朝では、まず王族による中央・地方の支配が確立されたが、元寇を経験したのち、王朝の後半に官吏登用試験が重視されるようになり科挙官僚が台頭した。15世紀初頭には、一時的に明の永楽帝の支配を受けるが、再び独立を回復して黎朝が建てられる。この時代に中国式の集権的官僚制国家が確立した。とくに黎聖宗の時期(1460-97)には、科挙制度・学校制度が確立し、民間でもこれに呼応して科挙ブームが起り、大量の士人が科挙を受験した。合格者の名前を記した進士題名碑が作られるようになった。これらの碑文は現在も文廟内に残されている。合格者の子孫が捧げたものであろうか、花束が置かれているのを見かけたこともある。

16世紀に入ると黎朝は一旦莫朝に政権を奪われ中断するが、地方で中興を果たし、世紀末には都を回復する。しかし、中興を推進した鄭氏が実権を握り、黎帝は名目的存在となった。また、15世紀後半に中部に移った鄭氏が地方政権を樹立した。莫朝、鄭氏政権下でも科挙は続けられた。鄭氏政権下では予備審査での不正が横行したことが記録されている。また、中部の阮氏政権は、独自の試験制度を実施したが、9年に1度という悠長なものあり、試験内容も簡単であった。

18世紀末の西山朝の時代を経て、19世紀には、阮朝が南北を統一する。阮朝は、全土で科挙を実施し、試験会場は最大時(嗣徳年間初期)で全国に七箇所設置された。1807年に北部で郷試が再開され、1813年からは全国で郷試が実施されるようになった。1822年から中央試験(会試—殿試)が行われるようになった。開催時期は三年一比が原則であったが、恩科もしばしば行われた。

科挙受験者は次のような階梯を登ってゆくことを目指した。ベトナムでは、中国のような学校試(童試)は行われていない。その代わりに、年二回の学力試験(考課、課士法)と郷試に先立つ予備試験(考覈)が地方の学官により開催された。考課に合格した者は、課生と呼ばれ、学業に専念するために半年ないし一年の兵徭が免除された。科挙を受ける気もないのに、兵徭免除を受けんがために課を受験する人々のことを王朝は問題視した。負担逃れを目論む不屈き

者ばかりであったわけではない。村レベルでは課生でも立派な「知識人」の肩書きであり、尊重された。郷試の試験内容は、三場ないし四場であった。四場で行われるときは、①制義、②四六（詔表制）、③詩賦、④策問の四科目であった。それに加えて二次試験（覆覈）が課された。1834年から、地方・中央とも中国に倣い四六を省略したが、1850年に元に戻した。1858年には今度は、郷試から詩賦を省いたが、1876年には詩賦を復活させて、また四六を省いている。会試は50年以降四場制である。阮朝は1884年にフランスの保護国となるが、官人制度は温存され科挙制度も存続した。しかし、20世紀には試験内容に大きな変更が加えられ、従来の科挙とは全く別物となった。1906年にはフランス当局が近代的公教育制度を制定¹⁾、王朝にも「学部」（教育省）が設置され、科挙試験に改革が加えられた。次第に経義・詩賦の試験が消えてゆき、漢字・漢文だけでなくフランス語やローマ字表記のベトナム語の試験が課されるようになり、ベトナム史やインドシナ政治、地理、理数系の内容が加えられた。そのころには、民間でも近代教育の啓蒙活動が始まっていた。1905-07年に日本への留学運動（東遊運動）が展開され、1907年東京義塾という私立学校が作られている。1915年に北部最後の郷試が行われ、1918年に中部最後の郷試が実施された。そして、1919年に最後の中央試験が行われ、ベトナムの科挙は終焉した。これ以降、王朝の官人も近代高等教育機関の卒業者から採用されることになった。

1825年以降、郷試の合格者には挙人の肩書きが与えられた。それに次ぐものは秀才とされた。それ以前は、それぞれ郷貢、生徒と呼ばれていた。挙人、秀才は兵徭を免除された。中央試験の合格者には進士の学位が与えられ、それに継ぐものは副榜とされた。中国同様、進士には、第一甲進士及第、第二甲進士出身、第三甲同進士出身の等級が設けられた。最優秀合格者に対する三魁（状元・榜眼・探花）の肩書きもそのままベトナムに導入されたが、阮朝では状元は出さない慣例になっていたと言われる。合格者の特典としては、挙人の場合、冠と服を賜与され、祝宴が催された。進士の場合、冠・服・簪・綵を賜与され、祝宴が開かれ、さらに旗と偏額が支給され故郷に錦を飾る（榮帰 vinh quy）ことを許された。

郷試の採点には、二通りの方法があった。一場（科目）毎に採点し合格者を発表してふるい落とす方法と全科目を受験して総合点で評価する方法である。1825年に後者が採用され、1850年に前者に戻っている。一場毎にふるい落とす場合には、一場合格者、二場合合格者は、一定期間兵徭を免除された。一場合格者、二場合合格者は、nhất trường（一場）、nhì trường（二場）と呼ばれ、村レベルでは尊重され、私塾を開いて先生となるものも多かった（後述）。このような下級知識人の役目は「医・儒・理・数」であったと言われる。儒だけでなく、医学や地理風水や紫微斗数といった実践的な知識の担い手として活躍した。そのことは、村の聞き取りや家譜の記述からうかがうことが出来る。

阮朝の課税台帳に登録されている成年男子数は、最大時で約100万人である。登録されてい

1) それ以前から官吏養成学校の前身や通訳学校が置かれていた [Đào 2006] [Đỗ & Vũ 2006]。また、公教育が普及するのは1920年代になってからである。

ない外籍民も多数存在した。一方、阮朝期の挙人の数は、総計5225人、進士は558人である。非常に少ないことがわかる。しかし、科挙試験が不人気だったわけではない。地方で科挙を目指して学ぶ人々の数は決して少ないものではなかった。科挙合格者を出しえなかった村々にも少なからぬ科挙受験者が存在した。そして、彼らを教える村の私塾、村の先生も決して少なくはなかったはずである。

3 村の学校について

E.ポワソンは、前近代ベトナムの学校は次の四段階に分けられるとしている〔Poisson 2004:127-128〕。すなわち、①開心 (khai tâm, vỡ lòng)、②小習、③中習、④大習である。開心の段階は、村の私塾でオンドー、タイドー (ông đồ, thầy đồ) と呼ばれる先生が漢字や初歩の漢文を教えた。先生の家が学校であった。先生は、一場、二場、秀才レベルの人であった。小習の段階になると、詩、賦、文策など科挙を意識した内容に進んだ。中習は、課生を目指す段階であり、挙人・秀才クラスの人が受け持った。大習は科挙試験を目指す段階であり、官学や挙人以上の先生の教える学校が担当した。秀才・挙人以上の先生は、何らかの理由で官途につかなかったか、あるいは官職を辞して帰郷した人々であった。ただし、村の学校は、能力別に教室が分かれているわけではないので、様々なレベルの生徒が一緒に学んでいた。そのため、実際の学校が上の4段階に截然と分類されるわけではないだろう。第一段階と第二段階を兼ねる、第二段階と第三段階を兼ねるような類のことはしばしばあったのではないかと推測する。

ここでは、まず革命前の村の学校の様子を1990年代後半に実施した現地調査の資料をもとに瞥見し、さらにグエン・フウ・ムイの研究〔Nguyễn 2005〕などに基づいて、18-19世紀の村の教育及び村の儒教的知識人の状況の一端を検討したい。また、初等教育で用いられた教科書にも触れておきたい。

1996年と97年にナムディン省ブバン県バックコック社において、古老の聞き取り調査を行い²⁾、少なくとも1945年の革命前までは、この村に数人のオンドー、タイドーが居て、フランス植民地当局が科挙制度を廃止し公教育制度が推進したのちも、漢字・漢文を教えていたことを知ることが出来た。村方では、契約書や儀礼の祭文、寺の寄進碑文などが革命前まで漢字で書かれていた。50年代までには、衰退するようであるが、寺の碑文などは、それ以降の時期でも漢文で書かれているものがある。公教育に関しては、この村では、1930年になってようやく、村の公立学校が建設されたが、規模は小さく、一人の先生が全学年の全教科を教えていた。貧乏な家の子供は通うことができなかったという。40年代には、オンドーの中には、漢字・漢文だけでなく、クオック・グー (ローマ字表記のベトナム語) を教えるものも現れた。

2) 1996-98年度文部省科学研究費補助金 (国際学術調査)「紅河デルタ村落同族集団に関する社会歴史調査」(代表:嶋尾稔)による。

以下、村の古老の方々から提供された情報を記しておく。

BHA氏（1926年生）

- 漢字の勉強は、先生の書いた手本の上に紙を置き、写本形式で練習した。
- 声を出して教科書を読み、翌日、覚えているかどうかを先生がチェックする。先生に呼ばれた生徒が腕を前に組んで声を出して言う。間違えたら、口のまわりに墨で丸をつける。出来たら次の課へ進む。
- 先生（インフォーマントの父親）は、二場合格でông đồとなり、ニンビンやハイズオンにも教えに行った。
- 学費はそれぞれが自発的に渡す。旧正月には先生にお礼をする。先生の家のお忌日にもお礼をする。

NLN氏（96年に70歳）

- 生徒は先生の家に来て学んだ。午前中に書く練習をして、午後を読む練習をした。
- 先生には給料がなく、貧しかった。旧正月には、バインチュンと果物と3ハオを贈った。端午にも砂糖などの贈り物をした。
- 先生がなくなったときには、同門基金が費用を出した。同門基金は、各自もみ一籠を出し、同門の指導者がこれを貸し付けて、費用を捻出した。
- インフォーマントの配偶者の父も漢文先生で、ハーナム、ニンビン、フーリーに教えに行った。村の中には多くの漢文先生がいて、優秀な人もいれば、そうでない人もいた。詩や賦をつくるのが上手な人もいれば、そうでない人もいた。村の外に教えに行く人は優秀であった。妻の父は、遠くに出かける先生で詩もうまかったが、経済的には貧しい先生であった。
- 漢文先生は、読書以外は何も知らなかった。それゆえ貧しかった。10人中9人は貧しかった。家の仕事や生業は婦人が担当した。先生は米が残っているかも知らない。先生は教えることしか知らない。
- 先生は貧しかったが、大変尊敬された。道で先生にあったときは、非常に丁寧に腕を組んで挨拶した。

NB氏（1922年生）

- 7年間漢字を学んだが、よく休んだ。漢文先生の家で学んだ。非常に多くの漢文先生がいた。このあたりに4、5人の漢文先生がいた。
- 10人強の生徒が学ぶが、程度・学年の違う子が同時に勉強した。勉強をするほとんどの子が漢文先生の私塾で勉強した。

- ・ 45年以前には漢字にはまだ価値があった。子供が漢字を勉強に行くことは幸せであった。
- ・ 当時、漢字を勉強する意義は、契約書や祭文を読むことであった。
- ・ 40年ころから、ông đồもクオックゲーを教えるようになった。

ND氏 (1936年生)

- ・ 7歳で公立学校に入学した。先生は一人で、ベトナム語、フランス語、衛生、格致、倫理、地理、歴史、正書法、算数を教えた。その後、私塾でフランス語、クオックゲーを復習した。また、thầy đồ (NLN氏の妻の父) から漢文を習った。漢文を学んだのは、主として祭文を読むためであった。革命後もしばらくは漢字を教えていた。さらに thầy cúng (道教的な儀礼先生) に符水の本を習った。
- ・ 漢字の勉強は、午前と午後に行われた。まず、午前中に課文を書いて教える。まず、書き方を練習し、さらに意味と読みを教えた。生徒にこれを覚えさせた。午後にも読み直して覚えさせるようにした。翌日、本を閉じて読ませて記憶しているか否かを確認した。覚えていれば次の課に進んだ。字の書き方は、手本を写して勉強した。まず先生が手本を書き、生徒がそれを写した。
- ・ 集落内には4人の ông đồ がいた。社の中には、ほかに3人いた。自分の先生は、ハーナムやフーリーに教えに行き年を取って帰郷して、村で教えるようになった。
- ・ ông đồ はかつて科挙を受験し、一場などの資格を得ていた。
- ・ ông đồ は厳格であり、鞭で打つこともあった。字を書き間違えると口の周りに墨を塗られた。子供たちは、腕を組んで挨拶した。
- ・ 公立学校には金持ちの子が通い、貧しい家の子は ông đồ に習った。

その後、この村だけでなくナムディン省ヴバン県とその周辺の各地の村において、革命前に何人かの漢文先生が教えていた、あるいは他所に教えに行ったことを確認している³⁾。

次に、植民地化以前の状況を見てゆくことにする。従来、資料的な検討がほとんどなされて来なかった問題であるが、幸いなことに近年グエン・フウ・ムイが画期的な突破口を見出した。ベトナムの村方には様々な碑文が残されている。中国などと比べて印刷された資料の乏しいベトナムの歴史を研究するものにとって極めて重要な同時代史料である。仏領期にフランス極東学院が、これらの碑文の拓本を大量に作製した。それらは、54年以降、漢文チューノム研究所が継承した。現在、その影印本が順次出版されているところである〔Trình & Nguyễn & Papin 2005-2007〕。ムイは、これらの拓本の中から村の教育に関わるものを拾い出して整理し

3) 2002-04年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(B))「紅河デルタ農村における超村落的な実践と空間認識の歴史的研究」(代表:松尾信之)による。

た。初歩的な成果であるが、大変重要なものである。それらの碑文には、村の教育に関連して、①村の学校の建設、②学田の設置、③先生の招致、④師弟の援助といった内容が記されている。ムイの論文に依拠して、いくつかの碑文に残された情報を紹介する。

「学舎田土碑記」正和23（1702）年

- 各自がそれぞれ先生を招くやり方では後学のためにならないので、村で学校を建てて、文風を振興することにした。村人の寄付により校舎を建設する。
- 学田を置いて学問を奨励する。
- 規約第1条：最良の学田は先生の耕作地とする。
- 規約第2条：先生を招く際も、官員と斯文会に委任して、よく審査をして優れた先生を招くようにする。
- 規約第5条：先生が試験を受けに行くときには、村から2貫を支給する。斯文会が飲食をするときには、先生にも差し上げる。

まず、18世紀段階で、村が学校を建設し、外から先生を招く動きがあったことが知られる。その維持費用を捻出するために学田という水田が設けられたことも確認される。これはやや早期の出来事のようにはあるが、決して孤立した事例ではない。18世紀段階の学校建設に関する碑文として、「祠堂学田碑」景興17（1756）年、「郷塞条例」景興28（1767）年、「学田碑記」光中5（1792）年などが引用されている。ナムディン省ブバン県バックコック社で収集した阮廷族の家譜にも、18世紀段階で外部の先生の感化を受けて村に学校を開いている事例が見られる〔嶋尾 2000：228〕。その家譜によると、始祖から七代目の阮廷垣（18世紀の人）が別の県の先生に師事した。その先生は郷貢で知県を勤めたことがあった。先生の父も郷貢であった。廷垣は先生の兄の娘と結婚した。また、先生を招いて村の地理を見て祖先の墓の位置を決定してもらった。その息子の功茂（先生の兄の娘の子）が1779年に生徒に合格し、村に学校を開き、また、村の家譜編纂運動を指導した。

19世紀に入ってから村の学校建設の動きは続いていた。もう一例、やはりグエン・フウ・ムイの論文で検討されている碑文の内容を紹介する。

「郷学碑記」嗣徳8年（1855）

- 校舎二棟を建設した。
- 規約第5条：学田からの収穫は勝手に別の目的に使ってはいけない。
- 規約第6条：学田は村の4甲が分担して耕作し、毎年1マウにつき、450斗を納入する。それ以外は耕作者の取り分とする。
- 規約第9条：学校の四方の家は、酒を作ったり、喧嘩をしたり、女性をからかったり、

騒ぎ立てたりしてはいけない。学校の門の前では、牧童が牛や水牛をつないだり、笛を吹いたりしてはいけない。

- ・ 規約第10条：村の子供50人を就学させた科挙合格者には一貫の賞金を与える。
- ・ 規約第12条：師弟が共同で使用する学校の本箱の経書史書は、村の役職者が毎年日差しの強い日に干す。渡すときには、きちんと記録をして、家に持って帰らせない。違反したものは賠償させる。

高温湿潤のベトナムでは本の乾燥は極めて重要なことである。19世紀半ばには、このような学校設立運動が、相当顕著なものとなっていたであろうか。嗣徳6年(1853)には、王朝の側が、この民間主導の動きを公認する方針を打ち出している⁴⁾。

村の学校建設は、村の儒教文化の振興と密接に関わっていたようである。上に紹介した「学舎田土碑記」は、先生の選抜や歓待の際の斯文会の役割に言及している。グエン・フウ・ムイの論文によると、斯文会への加入資格について、碑文には次のような規定が見られる。

- ・ 斯文会に加入するには科挙に受からなくてはならない（フックイエン省タインハ県ザハ社）。
- ・ 村の中の何人かが、科挙に受かるか、官職を得れば、斯文会に加入できる（フックイエン省タインハ県アンラオ社）
- ・ 科挙に合格し、文址で謁聖の礼を行い、古銭一貫二陌相当の豚肉、おこわのお盆、酒一瓶、ベテル一箱を納めれば、斯文会に加入できる（バックニン省ザービン県スアンライ社）

科挙合格を条件とするこれらの規定が本来の姿であったのであろう。2番目の規定などは、科挙以外のコースで官職を得た者にも加入資格を与えているようである。20世紀初頭にベトナム風俗を記述したファン・ケー・ビンによると、彼の見聞した村では、科挙に合格していない人も含めて、村の上層部全体が斯文会を構成していたようである〔Phan 1990: 130-131〕。

上の規定にも見られるが、斯文会の重要な仕事は、文址での儀礼である。文址とは何か。基本的には村や地方の先賢（科挙合格者）を祭る施設である⁵⁾。グエン・フウ・ムイの論文によれば、村が招いた先生がなくなったときに門下生が、お金や土地を斯文会に寄進して、「后賢」⁶⁾とし

4) 「準諸地方有置公私田為郷学、以教郷子弟、崇教化、厚風俗者、各從民便」『大南寔録正編第四紀』巻9、41a、嗣徳6年冬10月条。

5) 文址についてはさしあたり以下を参照。〔Lâm 2005〕

6) 村の有力者などが、村に寄付をすることで、寺・殿・文址において死後の命日祭祀を執り行ってもらい「后 hậu」という習俗がベトナム北部では広く見られた。祭祀される対象は、寺では「后仏」、殿では「后神」、文址では「后賢」と呼ばれた。

て文址で祭ってもらう場合もあったようである。

村の聞き取りによると、斯文会、文址は、科挙廃止後も存続していたようである。公教育の初等の学位（初学要略）が加入資格となった。革命後もしばらく続くが、抗仏戦争期に消滅した。

村の教育に関して、どのような教科書が使われていたかという問題に触れておきたい。村の聞き取りでは、革命前の時点で使われていた漢字・漢文教科書として『三字経』『天南四字経』『幼学五言詩』の名前が挙げられた。ズオン・クアン・ハム、ウッドサイド、ポワソンなどが言及している『初学問津』の名は北部の村方では聞くことがなかった。『三字経』は言うまでも無く、中国のテキストを導入したものである。『天南四字経』は、漢文チューノム研究所の目録によれば、ベトナム史を内容とするものであり〔Trần & Gros 1993〕、ベトナムで作られたものようであるが、詳細は不明である。『幼学五言詩』はながらくベトナムで作られたものではないかと見なされていたが、近年になって、中国の『神童詩』を導入して別名を付したものであることが「発見」された〔Trần 2000〕。『幼学五言詩』の嗣徳16年（1863）の版本（学文堂蔵板、国家図書館蔵）を見ると、漢文5字句の横に小さくチューノム表記のベトナム語訳が付されている。

2005年にニンビン省で村方文書の調査⁷⁾を行ったが、村方に残る漢文蔵書の中に『啓童説約』という初等教科書が含まれていた。このテキストは、漢文チューノム研究所に3種類の版本が蔵されている。東洋文庫にも1種類の版本が所蔵されている。版を重ねていること、地方に流通していることからして、全く普及しなかった本というわけではないと思われる。嗣徳6年（1853）に范復斎が編纂したものを進士呉世栄が潤色したテキストである。版本は、嗣徳34年（1881年）刊のものが2種類、保大7年（1932年）が1種類残っている。本文は4字句からなる初等漢字漢文教科書であるが、嗣徳34年の版本は二巻からなり、上集はベトナムに関する基礎情報を集約した別個のテキストであり、また、下集の方も、本文に詳細な解説を付している。保大年間の版本は本文のみを刊行している。しかし、漢字に加えて、チューノムとローマ字によるベトナム語訳が付されている。本文の内容は、天地人に関する記述の後に、ベトナムの地理や歴史の概観が続いている。かなり高度なものである⁸⁾。

7) 2005-07年度日本学術振興会科学研究費・基盤研究（B）「文献・碑文資料による近世紅河下部デルタ開拓史研究」（代表：八尾隆生）による。

8) 研究集会の会場において、佐藤進先生（二松学舎大学）より、『啓童説約』と中国の『幼学瓊林』の類似性についてご指摘を賜った。この問題も含めて、『啓童説約』については、さらに研究を進める予定である。

4 都市の学校について

都市の学校については、これまで私自身は独自の研究を全くしたことがない。ここでは、19世紀ハノイの学校について最近公表された研究の成果を紹介するにとどめたい〔Poisson 2004:128-138〕〔Hà 2006〕。

19世紀ハノイでは、レベルの高い学校の設立が切実な問題であった。阮朝が成立し、都がハノイからフエに移ったため、1803年にはそれまでハノイに置かれていた國子監もフエに移ることになった。さらに1827年にはその蔵書もフエに移された。これらのことは、ハノイの知識人に、大変なショックを与えたと思われる。

19世紀初頭にまずホアンキエム湖のほとりに范貴適の学校が開かれる。さらに1833年に武宗璠の学校、1854年に阮文超の学校が開かれた。そののちもいくつかの学校が設立され、1907年には、やはりホアンキエム湖のほとりに近代教育（クオックゲー、フランス語、数学、衛生、理科、歴史、地理、文学などの科目）の啓蒙を目指した東京義塾が創設された。これらの学校の創設者には、進士クラスの知識人も含まれている。そして、師弟関係でつながっていることが注目に値する

立斎范貴適（1760-1825）は、ハイズオン省の出身で、黎朝時代に科挙合格を果たした人物である。（1777年郷貢、1779年の進士）。王朝交代後、阮朝でも重用され、ハノイの督学を勤めている。引退後にホアンキエム湖の近くに学校を開き、多くの科挙合格者・高官を生みだした。具体的には、武宗璠、阮文超、高伯适、陳文為である。彼らも引退後にハノイで学校を開いた。

なかでも重要なのが、湖亭武宗璠の学校である。彼は1826年に進士となり、1833年の北寧の督学に任じられた。1838年に学校を開くと、「5間」の建物に四方の学生数千があふれた。やはり、多くの科挙合格者・高官を生み、その中からまた学校を開くものが現れた。さらに武宗璠はホアンキエム湖周辺の文化の発展にも貢献した。1832年に「寿昌文会」を設立し、会のオフィスとして、寿昌県の文址を建設した。この文化事業を拡大して、彼を会長とする「向善会」を設立し、そのオフィスを、ホアンキエム湖の川中島の玉山廟に置き、ハノイの知識人の交流を促進した。

芳亭阮文超の学校も有名であった。彼は1825年に挙人、1838年に副榜となった。1854年に引退して学校を開いた。彼は、芳亭詩集、大越地輿全編（芳亭地輿志）など多くの著作をものした。彼の学校も多くの科挙合格者を輩出した。彼の学校の前に陳文為の学校もあった。

阮輝徳（1824-98）は武宗璠の弟子で1858年の挙人、母の世話をするために仕官せず、郷試の試験場の近くに学校を設立した。評判の学校で1000人に近い弟子が集まった。阮朝の保護国化後、フランス当局に誘われたが、応じず隠遁した。

ルオン・ヴァン・カン、まず村の秀才に学問を教わり、その後、阮輝徳の下で研鑽をつんだ。1874年には挙人となり、懷徳府の教授を任命されたが、それを受けず学校を開いて先生となった。植民地化後、師同様フランス当局の協力要請は断り、同志とともに東京義塾を開いた。

むすびに代えて

3章において、『啓童説約』を潤色した人物として呉世榮の名を挙げたが、彼が沿海部の群英社という村に師として招かれ村の礼教の基礎を築いたことが記録に残っている⁹⁾。ポワソンによれば、この陽亭呉世榮という人物も、范貴適の弟子であった。19世紀ハノイの知的サークルは、このような幅広い教育活動に携わる人物を輩出していた。村の教育と都市の教育の関係についても検討を進める必要がある。

文 献

- Aubaret, G. 1867. *Grammaire Annamite suivie d'un vocabulaire Français-Annamite et Annamite-Français*. Paris: Imprimerie Imperiale.
- Bonet, Jean. 1899-1900. *Dictionnaire annamite-français* (音). Paris: Imprimerie nationale, E.Leroux.
- Cordier, George. 1934. *Dictionnaire Français - Annamite* (法越字彙). Hanoi: Imprimerie Tonkinoise.
- Cooke, N. 1994. "Nineteenth-Century Vietnamese Confucianisation in Historical Perspective: Evidence from the Palace Examinations (1463-1883)." *Journal of Southeast Asian Studies*. 25-1.
- Cooke, N. 1995. "The Composition of the Nineteenth-Century Political Elite of Pre-Colonial Nguyen Vietnam (1802-1883)." *Modern Asian Studies*. 29-4.
- Dương Quang Hàm. 1943. *Việt Nam Văn Học Sử Yếu*. Hanoi: Direction de l'Instruction Publique en Indochine.
- Đào Duy Anh. 1936. *Pháp- Việt từ điển* (法越辞典, *Dictionnaire Français Annamite: chú thêm chữ Hán: avec transcription en caracteres chinois des termes sino-annamites*). Huế: Quan- Hải Tùng-Thư.
- Đào Thị Diễm. 2006. "Vài nét về trường hậu bổ ở Hà Nội (1897-1917)." *Nghiên cứu Lịch sử*. 365.
- Đỗ Hương Thảo. Vũ Thị Minh Thắng. 2006. "Về kỳ thi bổ sung trong kỳ thi hương truyền thống." *Nghiên cứu Lịch sử*. 365.
- Genibrel, J.F.M. 1898. *Dictionnaire annamite-français*, Saigon: Imprimerie de la Mission a Tan Dinh.
- Hà Mạnh Khoa. 2006. "Giáo dục thời Nguyễn ở Thăng Long - Hà Nội (1802-1919)." *Nghiên cứu Lịch sử* 362.
- Hội Khai Trí Tiến Đức Hội khởi thảo. 1931. *Việt Nam Tự Điển*. Hà Nội: Imprimerie Trung Bac Tân Van,
- Lâm Giang. 2005. "Văn bia văn chỉ Yên Phụ Văn Phái huyện Yên Phong tỉnh Bắc Ninh." *Tạp Chí Hán Nôm* 71.
- Nguyễn Hữu Mùi. 2005. "Vài nét về tình hình giáo dục Nho học ở cấp làng xã qua tư liệu văn bia." *Tạp Chí Hán Nôm* 71.
- Nguyễn Khắc Viện. 1993. *Bản về Đạo Nho*. Hà Nội: Nxb. Thế Giới.
- Nguyễn Quang Thắng. 1993. *Khoa cử và Giáo dục Việt Nam*. TP.HCM: Nxb. Văn Hóa Thông Tin.
- Nguyễn Thị Chân Quỳnh. 2003. *Khoa cử Việt Nam Quyển Thượng Thi Hương*. TP.HCM: Nxb. Văn Học.
- Phan Kế Bình. 1990. *Việt Nam Phong Tục*. TP.HCM: Nxb. Tổng Hợp Đồng Tháp.
- Pegneau de Behaine (Nguyễn Khắc Xuyên dịch). 1999. *Tự Vị Annam Latin*. TP.HCM: Nxb. Trẻ.
- Poisson, Emmanuel. 2004. *Mandarins et subalternes au nord du Viet Nam: une bureaucratie à l'épreuve*. Paris:

9) 『群英社誌』

- Maisonneuve & Larose.
- Rhodes, Alexandre de (Thanh Lăng, Hoàng Xuân Việt, Đỗ Quang Chính dịch). 1991. *Từ Điển Annam-Lúitan-Latinh*. TP.HCM:Nxb.KHXH.
- Taberd, J.L. 1838. *Dictionaium Anamitico-Latinum*. Fredericnagori vulgo Serampore : ex typis J. Marshman.
- Texier, M. 1962. "Le Mandarin au Viet-Nam au XIX siècle." *Bulletin de la Société des études Indochinoise*.37-2.
- Thế Anh. 1997. "Sách học chữ Hán cho học sinh nhỏ tuổi ngày xưa." *Tạp Chí Hán Nôm* 30.
- Trần Nghĩa & Gros, Francois. 1993. *Di sản Hán Nôm Việt Nam thư mục để yếu*.Hà Nội: Nxb. KHXH.
- Trần Ngọc Thuận. 2000. "Về nguồn gốc và tác giả của cuốn Ấu học Ngữ Ngôn Thi." *Tạp Chí Hán Nôm* 42.
- Trịnh Khắc Mạnh. Nguyễn Văn Nguyên. Papin,P. 2005-2007. *Tổng Tập Thác Bản Văn Khắc Hán Nôm 1-10*. Hà Nội: Viện Nghiên cứu Hán Nôm. EFEO.
- Truong Buu Lam. 1982. *New Lamps for Old*. Singapore: Maruzen Aia.
- Woodside, A.B. 1988. *Vietnam and the Chinese Model: a Comparative Study of Vietnamese and Chinese Government in the First half of the Nineteenth Century*. Cambridge, Mass. Harvard University Press.
- 嶋尾 稔. 2000. 「一九世紀—二〇世紀初頭北部ベトナム村落における族結合再編」吉原和男・鈴木正崇・未成道男編『〈血縁〉の再構築：東アジアにおける父系出自と同姓結合』東京：風響社.
- 嶋尾 稔. 2001a. 「ベトナム村落と知識人」小嶋毅・伊原弘編『知識人の諸相：中国宋代を基点として』東京：勉誠社.
- 嶋尾 稔. 2001b. 「阮朝：〈南北一家〉の形成と相克」『岩波講座 東南アジア史 第五巻』
- 竹田龍児. 1962. 「阮朝科挙制度の一考察：饒学試法と課士法を中心として」『東方学会十五周年記念論集』
- 竹田龍児. 1964. 「安南科挙制度小考：覈について」『史学』37-1.
- 竹田龍児. 1975. 「阮朝初期の清との関係（1802-1870）」山本達郎編『ベトナム中国関係史』東京：山川出版社.
- 近田政博. 2005. 『近代ベトナム高等教育の政策史』東京：多賀出版.
- 藤原利一郎. 1986 (1978). 「黎朝前期の学校：とくに科挙との関係について」『東南アジア史の研究』京都：法蔵館